

学位研究 第1号 平成5年3月 (論文)
〔学位授与機構研究紀要〕

英国における高等教育システムの改革

——ポリテクニクからユニバーシティへ——

Reformation of the Higher Education System in the United Kingdom:
Upgrading of Polytechnics to University Status

齋 藤 安 俊

Yasutoshi SAITO

英国における高等教育システムの改革

——ポリテクニクからニューバースティへ——

齋藤安俊*

1. はじめに

第10回国際熱分析会議(10th International Congress on Thermal Analysis)が1992年8月24日から同28日まで英国で開かれたのを機会に、ロンドンおよびその周辺の幾つかの大学・研究所を訪問することができた。その中でも、国際会議の会場となった University of Hertfordshire は、1991年5月に高等教育白書(White Paper on Higher Education: A New Framework)で提案された“binary line”の廃止に基づき、1992年6月16日付けで Hatfield Polytechnic から昇格した“新しい”大学である。同大学化学科の D. V. Nowell 教授が上記国際会議の組織委員長であり、会議の運営と進行に追われて多忙なことから、十分には話を聞くことはできなかったが、各種資料の恵受を受け、また直接の見聞によって、当大学を中心にした英国における高等教育改革の一端に触れることができた。さらに、国際会議には英国の多数の専門家が出席し、その中には大学教授のほか、英国の学位、とくに博士号を持つ研究者がかなり含まれていたもので、博士号取得についても新たな知見を得ることができた。

本報では、1992年、高等教育システムの改革により新たに大学となった University of Hertfordshire とその前身である Hatfield Polytechnic の設立の経緯、ポリテクニクから大学へと引き継がれた幾つかの特色、ならびに博士の学位授与に関する問題点について述べる。

2. ポリテクニクの創設

英国では少なくとも150年にわたって、「複線化された高等教育(differentiated system of higher education)」と呼ばれ⁽¹⁾、(1)大学(university)、ならびに(2)カレッジ(college)やポリテクニク(polytechnic)という2つのセクターの区分をもつシステムがとられてきた。1939年に始まった第2次世界大戦は、英国における教育業務において、疎開や立ち退き、教職員の不足、建築計画の保留や延期など、幾つかの混乱を引き起こしたほか、社会的姿勢そのものにも重要な変化をもたらした。そのため、政府としては、活動と業務の範囲を越えて、より良き将来に向けた計画を立てるための決定を行った⁽²⁾。教育の再建計画は、ヨーロッパ戦線で勝利の見通しがついた1944年、戦争内閣あるいは挙国内閣と呼ばれた連立政権の手により、1944年教育法(Education Act, 1944)として制定された。なお、この教育法は、時の文部大臣であった R. A. Butler の名前をとってバトラー法とも呼ばれている。

*学位授与機構審査研究部教授

1944年教育法は、教育法制定では1902年以來の最も重要なものの1つであるともいわれているが⁽²⁾、教育の機会均等を指導理念として、中等教育を全国民に開放することを目標に、それまでは14歳であった義務教育期間を15歳または16歳まで延長した。そして、公的な教育は、初等教育(primary education)、中等教育(secondary education)、および継続教育(further education)の3つに分類された。中等教育までが義務教育で、継続教育は、大学およびカレッジにおける高等教育(higher education)を除く、それ以後の教育を指している。このような教育制度の改革と同時に、教育院(Board of Education)を廃して、中央官庁としての文部省(Ministry of Education)に置き換え、その大臣は中央で大きな発議権をもつことになって、国の教育業務にはこれまで以上に統一性と標準化をもたらした。

それにもなって、地方教育当局(Local Education Authority; LEA)が独立し、最終的には大臣の管理と監督の下にありながらも、幾つかの新しい法定の義務や権限を与えられた。その結果、LEAは、各地域毎に適当な場所や施設を設け、義務教育を終えた後、正規の大学に行かない人々に対して、全日制(full-time)と定時制(part-time)の教育の機会を用意することになった。その結果、前述の2つのセクター区分は、1960年代になって、バイナリー・ポリシーとして認知され⁽¹⁾、ポリテクニクを含む他の高等教育機関と大学との間にあるバリアー、すなわち“binary line”は英国高等教育における大きな特徴の1つとして⁽³⁾最近まで続いたのである。

3. ハットフィールド・ポリテクニク

本報の主題となるハットフィールド・ポリテクニク(Hatfield Polytechnic)はハーフォードシャー州(Hertfordshire)に設置されたもので、その主キャンパスの所在地ハットフィールド市はロンドンの北、約20マイルに位置し、車で国道A1(M)線を北上して所要時間は30~40分程度、国鉄を利用するならば、King's Cross 駅、または Moorgate (旧 Liverpool Street) 駅から Hatfield 駅まで40分乃至1時間(曜日にもより、また、運転間隔は15~30分)である。Hatfield 駅の真正面には、「英国貴族の館」といわれるカントリー・ハウスの1つであるハットフィールド・ハウスの門がある。カントリー・ハウスの大部分は交通が不便な所にあるが、この館はロンドンから最も容易に訪れることができるとされている⁽⁴⁾。なお、主キャンパスはHatfield 駅の南西約2マイルの所にある。以下、ハットフィールド・ポリテクニクの創設に至る経緯を簡単に紹介する⁽⁵⁾。

ハーフォードシャー州には、以前は Watford と Letchworth にカレッジが存在するだけであったが、前節で述べた1944年教育法によって、地方自治体がそれぞれの地方における継続教育を行うことが義務づけられ、上級学習コースを提供する地区カレッジとして1949年に Hatfield Technical College が設立されるに至った。その間、1946年にはカレッジの計画と secondary technical school である Hatfield School に隣接して敷地を共有することが文部省を通り、1948年には現在の Hatfield キャンパスで巨大な建設工事が開始された。本カレッジは元来、デ・ハビランド航空会社(de Havilland Aircraft Company)の会長であった Alan Butler 氏の優れた発想と厚意によってスタートしたものである。デ・ハビランド社は、第2次大戦中は高速爆撃機の異名をとったモスキート機を、また戦後はジェットライナーの先駆者となったコメット機を製造したが、現在で

は英国航空機会社 (British Aerospace) の本拠地となっている Hatfield に拠点を決めており、Butler 氏は技術実習生には最高の訓練を保証することを強く望んでいた。同氏は個人の私有地90エーカーを寄贈し、州議会に対して公立 technical college を創設するよう求めていたが、それが実現すれば同氏自身の労働力に対する学校教育の役を務めることにもなるのであった。結局、これが1944年教育法により実現したのである。

本カレッジの建物は1952年に完成し、9月にはサンドイッチ型(sandwich)、定時制昼間型(part-time day)、および定時制夜間型(part-time evening)の学生を受け入れた。カレッジの認可当時、地方当局はハーフォードシャー州内で広範囲に及ぶ初級および中級の学習コースを提供する地区カレッジを、最終的には全州的な1つのグループとして設立することを計画した。1950年代には、これらのカレッジが具体化し、Hatfield Technical College との間の連携が持ち上がった。そのため、Hatfield Technical College としては、より上級コースの工学に専念して、そのほかのことはカレッジに引き渡すことになった。そのことは、結果的に Hatfield Technical College の立場を高めることになった。すなわち、その後、college of technology として分類されて Hatfield College of Technology となり、次いで、地方カレッジとしてロンドン大学の学外学位(external degree)、最終的には CNAA 学位に係ることになった。

1956年2月、工学教育白書(White Paper on Technical Education)が発表され、technical college のヒエラルキイ、すなわちピラミッド型組織が示された。それは、地方、地域、そして地区のカレッジはピラミッド構造を構成しており、college of advanced technology がその頂点となって、専ら先端的な科学技術研究に専念するというものである。それに基づいて、1956年11月には、Royal Technical College, Salford (現在の University of Salford) など8つの technical college が college of advanced technology に選ばれた。多くの大学が設立されたこの1950年代の終わりには、文部省では、Hatfield Technical College の工学系学部を取得することと関連づけて Chelsea College を大学として評価することが検討された。この動きは2年位で沙汰止みとなったが、Hatfield Technical College はこれを契機として徐々にではあるが、かつ着実に前進したのである。その後、1961年、文部大臣は college of advanced technology は文部省から直接 grant(補助金)を受け取ることを提案し、1962年4月1日から実施された。

1963年10月、Lord L. Robbins を委員長とする高等教育委員会(Committee on Higher Education; 通称 Robbins 委員会)は、“Robbins Report”として知られている報告書を提出した。同委員会は、指名以来 college of advanced technology によってなされた著しい発展を認めたが、これらのカレッジの能力と地位は、なされている仕事にとって最早ふさわしくないこと、そして、このことは教職員、学生にとって等しくカレッジを魅力の少ないものにしていくという意見を表明した。その結果、カレッジは自らの手で第1学位と高等学位を授与できる大学の地位を占めるべきであることが推奨された。また、カレッジは大学にふさわしい国家管理の形をとるべきであること、即座の対応としては、勅許状を授与して、財政上の責任を大学財政に責任のある組織に移すべきことを提案した。これらは当時の政府によって、ほとんど直ちに受け入れられた。

Robbins 委員会の勧告に基づいて、1966年から1967年にかけて Aston, Bath, Bradford, Brunel,

City, Loughborough, Surrey, Salford など高水準の college of advanced technology が大学に昇格した。これらの大学は EX-CATS または Technological Universities と呼ばれており、1959年から1965年の間に創設され「新大学 (New Universities)」と総称されてきた East Anglia, Essex, Keele, Kent, Lancaster, Stirling, Sussex, Ulster, Warwick および York の10大学とは区別されている⁽⁶⁾。EX-CATS と呼ばれるこれらの大学昇格とともに、1966年、ポリテクニクが30校、高等教育機関としてスタートすることになる。Hatfield Polytechnic の前身である Hatfield College of Technology は、この時の政府白書によりポリテクニクに指名された。前述のように、Chelsea College と Hatfield College of Technology の一部から University of Hertfordshire を設立する提案は、1965年、政府によって却下されたが、Hatfield Polytechnic は合併や吸収によって創設されたのではない唯一のポリテクニクであると自負している。

その後、Hatfield Polytechnic は若くて熱心なスタッフを揃え、小さいながらも活力に富んだカレッジとして、国内的にも、また国際的にも安定した信望を得てきたのである。1970年、元の文部大臣で Leeds University の副学長 (vice-chancellor) の Sir Edward Boyle が Hatfield Polytechnic の初代学長 (director) の Sir Norman Lindop に「大学とポリテクニクとの境界、いわゆる “binary line” が続くとは思ってもいなかった。」と述べたのに対して、Lindop 学長は「それは高等教育のいつまでも続くような特徴とは考えていない。」と答えたが、同学長は、2つのシステムが合体した時、その結果拡大した高等教育システムに強く影響するように、ポリテクニクが新しい、また独特なセクターを確立できるくらい、長期間続くことを希望していたという⁽⁶⁾。当学長時代の1966年から1982年までの間に、Hatfield Polytechnic は5倍に膨張し、ポリテクニクとそれを公認する CNAА の旗艦となったことを誇りにしている。

4. ユニバーシティへの昇格

1988年教育改革法 (Education Reform Act 1988) は、義務教育段階における全国共通の教育課程、すなわちナショナル・カリキュラムの導入のほか、地方教育当局 (LEA) や学校理事会の権限・役割の大幅な改変を目指すものであった。高等教育においては、大学補助金委員会 (University Grants Committee; UGC) を廃止して、大学財政審議会 (University Funding Council; UFC) を設置し、それを通じて政府が影響力を行使できるようにした。これは、UGC が全部ではないにしても大部分が大学教授から構成されていたのに対して、産業界や商業界から素人の委員を多数入れたのが特徴で、UGC 時代には資金を単に分配するだけだったのとは異なり、経費と政策を管理するのが狙いであるとされている⁽⁷⁾。さらに、本改革法は、ポリテクニクと大きなカレッジを LEA の管理から切り離し、新たにポリテクニクおよびカレッジ財政審議会 (Polytechnics and Colleges Funding Council; PCFC) を設置して、これから補助金を交付することになった⁽⁷⁾⁽⁸⁾。その結果、ポリテクニクは法人組織として高等教育の国家的システムの枠組みに組み込まれ、政府は PCFC を通じてポリテクニクにも影響力を行使することになった。1988年8月に制定されたこの教育改革法により、1989年、Hatfield Polytechnic はハーフォードシャー州議会から脱離し、Hatfield Polytechnic Higher Education Corporation として自立したのである。

1991年5月の高等教育白書においては“binary line”の廃止が提案された。英国の大学は国から独立した法人であり、その創設は枢密院(Privy Council)の助言に基づく国王の勅許状(Charter)によるとされている⁽⁹⁾。枢密院は1992年6月16日、University of Hertfordshireの創設を認め、ここにハーフォードシャー州内の13の町につながりをもち、3つのキャンパスからなる新しい大学が誕生したのである。

5. ハーフォードシャー大学の現況

新しい大学 University of Hertfordshire (ハーフォードシャー大学; 以下UHと略記する。)として、学生の受入れは1992年9月に始まり、また最初の学位は1993年に授与される。学位授与はポリテクニクの延長上にあると考えられるので、大学昇格後に最初から学習した学生が学位を受けるのはその先ということになる。ポリテクニクでは学位授与にCNAAが係わっていたとはいえ、とくにHatfield Polytechnicは研究学位の認定も受けており、大学に昇格しても教員構成やカリキュラムなどに大きな変化は無いようである。学部(school)や学科(department)もほぼ同様であるが、若干の改変・増設が行われ、ポリテクニク時代に特色としていたCombined and Continuing Studiesのコースが1つの組織となり学部レベルにランク付けされている。

当大学は3つのキャンパス、7学部から成り、そのほか天体観測所と生物実習所を持っている。各部署の所在をキャンパスごとに示すと次のとおりである⁽¹⁰⁾。

Hatfield キャンパス：先に述べたように、ポリテクニク時代からの主キャンパスであり、School of Combined and Continuing Studies, School of Engineering, School of Health and Human Sciences, School of Information Sciences, そして School of Natural Sciences がある。

Hertford キャンパス：主キャンパスの東、約10マイルの所で、Business School がある。

Wall Hall キャンパス：主キャンパスの南西、約10マイルの国道M1の近くで、School of Humanities and Education がある。

Hatfield Technical College の講義室で席を占めた最初の学生の一人は1,738名で、そのうち全日制学生は55名に過ぎなかったが⁽⁵⁾、その後、学生数は増加の一途を辿っている。大学に昇格した

Table 1 Student Population at University of Hertfordshire, 1991-1992⁽¹⁰⁾.

School/Centre	Full-time	Sandwich	Part-time	Evening only	Total
Business	424	597	321	0	1,342
Engineering	709	1,051	211	0	1,971
Health and Human Sciences	952	0	336	0	1,288
Humanities and Education	1,115	0	454	114	1,683
Information Sciences	346	458	410	0	1,214
Natural Sciences	82	667	431	0	1,180
Combined and Continuing Studies	559	0	27	0	586
Totals	4,187	2,773	2,190	114	9,264

時点における在籍学生総数は9,200名余で、各学部毎のコース別による詳細は Table 1⁽⁴⁾のとおりである。1995年までには、14,500名の学生がUHの学位取得コースに加わることが予想されている⁽⁵⁾。

そのほか、UHは同じ州内にある幾つかのカレッジと密接な協力または連携の関係にある。St Albansにある Hertfordshire College of Art and Design は、UHとは大学昇格前から長年の伝統で共同と協力の関係にあったが、ハーフォードシャー州議会の管理から離れる1993年4月には、UHに統合されて School of Art and Design となる予定である。1992年7月現在、学生総数は1,253名で、内訳は全日制345名、定時制468名、夜間部440名である。ほかに440名が短期コースの課程に出席している。また、詳細は次節でのべるが、下記の4つの地方カレッジがUHの教育に深く関わっている〔数字は最近の学生概数で、()の中は全日制学生の内数〕。

Hertford Regional College ……………17,000 (2,000)

North Hertfordshire College ……20,000 (2,000)

Oaklands College ……………46,000 (6,500)

West Herts College ……………35,000 (3,500)

これらの関連のカレッジを含めると、UHが組み合わせた専門分野を通して、実に14万人が教育を受けることになる。

6. ハーフォードシャー大学の特徴

6.1 連携カレッジ

UHは、連携カレッジ (Associate Colleges) と称する新しい、ユニークな、そして潜在的に強力なネットワークを確立しているのを誇りにしている。これはハーフォードシャー州内で高等教育と継続教育を担当している Hertford Regional, North Hertfordshire, Oaklands, および West Herts の前述4つのカレッジが、大学との合意によって大学の履修単位を提供する仕組みである。このユニークな連携カレッジのネットワークにより、1992年9月から、州内における継続教育のこれらのカレッジの学生は、UHの学位に向けて第一歩を踏み出した。加えて、学生は第1学年を地元のカレッジで、残りの学年を大学でそれぞれ過ごすことによって、学士号取得の勉強が可能になった。また、これによりUHにおける幾つかのコース、例えば HND in Business and Finance (HND; Higher National Diploma, 高等国家資格証書), B. Eng in Extended Engineering の第1学年などがカレッジによって認定されることになった⁽⁶⁾。

連携カレッジ全体の概念は、大学それ自体に出席することなく、州内で高等教育に入る道を広げるものである。家族に対する責任、限られた勉強時間、そして通学の問題をもつ人々にとって、このことはより容易である。4つのカレッジはいずれもこれまでに10の異なるカレッジを合併して、今日の形を確立したもので、1993年にはハーフォードシャー州議会から独立することになっている。

大学やポリテクニクを志願する生徒は、16歳の時点で入学資格試験である GCE-A レベル試験において3科目を選択して受験しなければならないが、科目選択が大学やポリテクニクに入学してから専攻を決定つけてしまう。例えば、理科系では、数学、物理、化学のみを選択し、語学系では

英語（国語）と他の外国語だけが要求される。したがって、Aレベル試験が過度に専門化していることの弊害は以前から指摘され、改革が試みられているが、現在なお大学入試では重要な位置を占めている⁽¹¹⁾。そこで、大学で理学の学位を目指して勉強したいがAレベル科目を選択していない者か、あるいは型通りのBSc学位学習計画に通常要求される成績を持たない者でも、上記の連携カレッジでBSc Extended Degree in Scienceを志願することができる。Extended Degreeは4年または5年の計画で理科系1教科の選択または教科の組み合わせでBSc Honours/BSc degreeを授与されるようになる。まず、最初の1年をそれぞれのカレッジに通い、UHであとの3年、サンドイッチ・コースならばUHで4年と企業における1年を勉学する。なお、英国の大学における教科（subject）は学科（department）よりも小さい単位であり、学科の中には数個の教科が含まれている場合が多いという⁽¹²⁾。

6.2 複合コース

ポリテクニクの特徴の1つとして複合コース（combined courses）が挙げられる。これはBSc Honours 学位を目標にした理科系のコースが中心であるが、心理学や経済学を主にしたコースも設置されている。このコースでは多くの教科が用意されており、学生は教科群から選びだして自分のコースを組み立てる。わが国でも同様であるが、従来の大学の教育が学部毎に縦割りで行われ、専門分野が細分化されていたので、多様化し先端性に富んだ現代社会にとってむしろ弊害となって

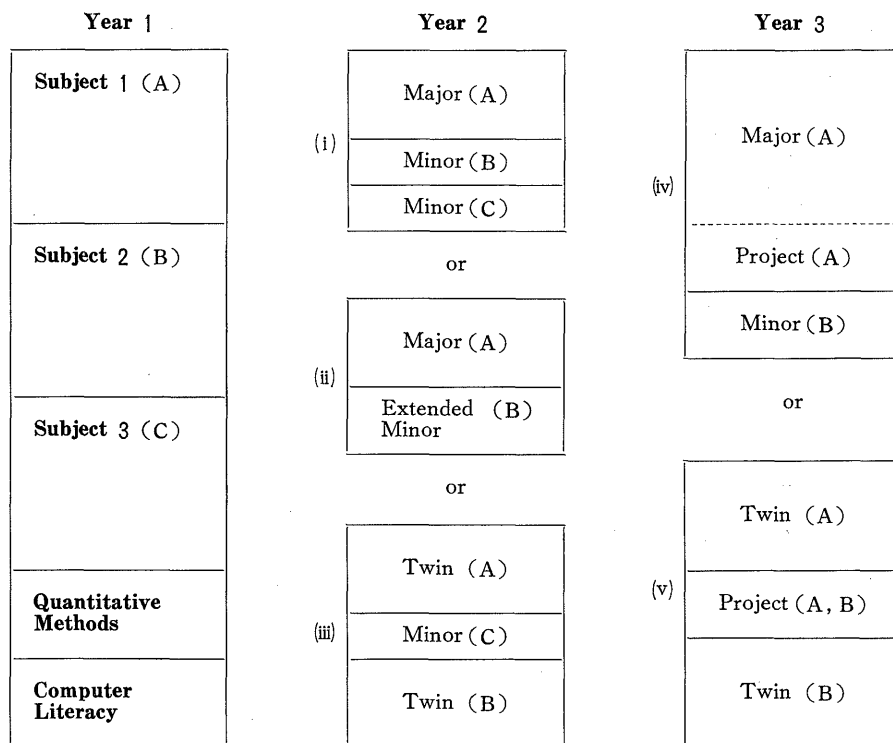


Fig. 1 Overall Pattern of Study for BSc Honours/BSc Combined Studies at University of Hertfordshire⁽¹⁰⁾.

Table 2 Subjects Offered to Combined Studies at University of Hertfordshire⁽¹⁰⁾.

Main subjects are shown in bold.	Mode of Study			
	Major	Twin-mode	Ext Minor	Minor
Applicable Mathematics	○	○	○	○
Applied Geology		○	○	○
Applied Physics	○	○	○	○
Astronomy	○	○	○	○
Business	○	○	○	○
Chemistry	○	○	○	○
Computing	○	○	○	○
Economics		○	○	○
Electronic Music				○
Electronics	○	○	○	○
Environmental Science	○	○	○	○
European Studies	○	○	○	○
French Studies				○
German Studies				○
Spanish Studies				○
Human Biology	○	○	○	○
Law	○	○	○	○
Linguistics				○
Manufacturing Systems	○	○	○	○
Operational Research		○	○	○
Philosophy	○	○	○	○
Policy Studies			○	○
Psychology	○	○	○	○
Statistics	○	○	○	○

きた。そのため、複合学習 (Combined Studies) のように幾つかの教科を選択し組み合わせて履修する様式は、近年、注目され、広く導入されるようになった。ポリテクニクでは職業上の必要性に対応して、独自にこのコースを設置していたが、わが国の工業高等専門学校の一部で試みられている2専門履修課程⁽¹³⁾がこれに対応するものと思われる。大学・高専をめぐる事態が急速に変化しつつあり、また、より優れた柔軟性が高く評価される今日、多分野専門教育は雇用者側にとってますます魅力あるものになることが期待される。

UHでは、ポリテクニク時代には、各学部 (school) の中に利用可能な教科を設定し、専門のセンターが学生に対する支援と助言を行っていたが、大学昇格後は School of Combined and

	Applicable Mathematics Applied Geology Law Manufacturing Systems Psychology Electronic Music	
Astronomy Chemistry Electronics European Studies Philosophy Statistics Policy Studies		Applied Physics Business Human Biology French German Linguistics
	Computing Economics Environmental Science Operational Research French German Spanish	

Subjects **within** any one group cannot normally be combined.

Please note: Psychology may not be studied with Statistics/Astronomy/
 Chemistry/Electronics/Policy Studies (but may be combined with Philosophy)
 Policy Studies may be studied with Philosophy

Fig. 2 Schematic Illustration of Timetable Subject Groups for Combined Studies at University of Hertfordshire⁽¹⁰⁾.

Continuing Studies という部局レベルとし、Combined Studies, Interdisciplinary Schemes, ならびに Continuing Studies と呼ばれる3つのコースを設けて、多くの学部・学科などの教科を含む多分野専門領域と学際領域を用意している。

まず Combined Studies では学生は business/law/economics/philosophy の教科群から、ならびに natural sciences/information sciences の大部分と engineering の一部の教科から選択して、いろいろな組み合わせることが可能であり、各専門教科の正規の履修をした者と同様な深さで各教科を修得することができる。BSc Honours/BSc の学位が全日制または定時制で取得可能であるが、高等教育資格証書 (Diplomn of Higher Edncation) や同証明書 (Certiticate of Higher Education) を受けることもあり得る。このコースの仕組みは極めてフレキシブルで、学生自身の興味と才能に応じて履修教科を組み合わせればよい。

複合コースの勉学は、主教科 (maior) と副教科 (minor) の組み合わせ方式、あるいは2つの教科をペアにしたツイン方式 (twin-mode) で行われる。履修例を模式的に Fig. 1 に示す。基本的に

は第1学年で3教科を選び、最終学年でそのうちの2教科を主教科として選択する。3教科のうちの2教科は Table 2 に示される主教科群から選択することが必要であるが、残りの1教科はもう1つの主教科でも、または副教科群の中の1つでもよい。教科は Fig. 2 のようにグループ分けされるが、同一グループ内での選択は認められない。第2学年および第3学年では図(i)~(v)に示す履修様式の1つを選択することができる。第3学年で履修する計画課題 (Project) は、1主教科を学習するならば、その教科中の問題を取り上げ、また、2つのツイン方式で学習する場合は、課題とすべき問題はいずれか一方の教科に関するものか、あるいは2つのツイン方式を結びつける学際的のものとなる。要するに、複合コースでは、2教科の最終選択を学位レベルでそれらを学習する機会を持つまで遅らせることができる。

履修の仕方を Fig. 1 で具体的に説明すると次のようになる。

第1学年：教科 (Subject 1~3 ; A, B, C) を選択し、共通として数学と計算機学のコースを履修する。

第2学年：選択した3教科のうち、(1)3教科すべてを継続するか、あるいは(2)2教科を引き続き選択するか2通りに大別される。(1)については、3教科のうち1教科(A)を主教科に、2教科 (B, C) を副教科とする(i)の例と、2教科 (A, B) をほぼ同時間のツイン方式にして主教科とし、1教科(C)を副教科とする(ii)の例がある。(2)については、(ii)のように、1教科(A)を主教科とするが、もう1つの教科(B)を拡張して副教科とするやり方がある。

第3学年：2教科 (A, B) を選択するとともに、最終学年として重要な要素である個々の計画課題に従事する。選択2教科のうちの1教科を主とする場合は、(iv)のように、主教科 (A) と副教科(B)を決め、主教科のトピックスに関する計画課題を含めて、主教科が全体の5分の4を占める。また、ツイン方式で2教科を選択した場合は、(v)のように各教科にほぼ半分ずつの時間をかけ、計画研究は一方またはもう一方の教科領域に基礎をおくか、あるいは教科を結びつけるトピックスに関するものとする。

卒業の際には、主教科・副教科方式で履修すれば、BSc Honours Combined Studies (subject X with subject Y), また、ツイン方式で履修すれば、BSc Honours Combined Studies (subject X and subject Y) の学位が授与される。

なお、この combined courses は「複合コース」と訳されているほか、モジュール・コース (module courses)⁽¹⁴⁾ またはモジュラー・コース (modular courses)⁽¹⁵⁾ として紹介されていることが多いが、modular courses は別の定義により説明されることもある⁽¹⁶⁾。

School of Combined and Continuing Studies における Interdisciplinary Schemes は文字どおり学際分野を対象にしているが、UHでは医用電子のコースが設けられている。また、Continuing Studies はUHとしては新しい、フレキシブルな成人教育の一環として単位累積互換制度 (CATS) に係わるコースである。

6.3 サンドイッチ・コース

サンドイッチ・コース (sandwich courses) は学習と実務経験を組み合わせた教育課程で、間歇的就業者職業教育⁽¹⁷⁾とも訳されている。UHの場合(実際にはポリテクニク時代のことであるが)、第1学位学生の半数以上は本コースで学んでいる。これは、まる1年、または2回以上に分かれた期間で合計して1年を企業で過ごし、大学で学んだ学理を実地に用いる学び方である。企業にいる間は、大学教員の監督を受けて仕事が評価されるが、企業から給料が支給されるのがふつうである。本コースを出ると実際の職業経験を持つので、それを競争の激しい職業市場で雇用者側に売り込むこともできる。

サンドイッチ・コースはポリテクニクや高等教育カレッジで1つの特徴ある課程となっていたが、幾つかの大学、とくに技術系大学でも設けられていた。例えば、著者が1980年に訪問したマンチェスター近郊にある University of Salford では integrated courses と称し、最も特徴あるコースであることを強調していた⁽¹⁸⁾。このコースにはとくに一定の様式があるわけではないが、多くの場合、6か月ごとに大学における勉学と企業における専門職養成とを繰り返すようになっている。このコースの学生は2つに分けられ、企業中心型 (industry-based) の学生は大学と協力して職業養成のすべての手配をしている企業によって保証される。そして、当該学生はコースの企業在籍期間、場合によっては大学に通学している時でも会社から給料を受け取る。そうでない場合は、地方教育当局が大学出席期間中は奨学金を支給し、この際、企業から補助を受けることもある。もう1つは大学中心型 (university-based) の学生で、企業に雇用されることはなく、ふつうに大学に通学し、学科が専門職養成のために適切な事業所を手配する。大学期間には地方教育当局から奨学金を受けるが、大学を離れている期間は一般に企業から給料の支払いを受け、企業の他のメンバーと同様の雇用条件を受ける。

サンドイッチ・コースは通学および通勤の期間によって次の2つのタイプに分類されることがある⁽¹⁹⁾。厚型 (thick) はふつう最初の2年間をポリテクニクで学び、次の12カ月をまるまる企業で過ごし、4年目は大学に戻るというやりかたである。一方、薄型 (thin) は企業体験が幾つかの期間から成っており、ふつう、最初の3年間は毎年大学学習と企業体験に分けて行われ、4年目または最終年度は完全に学内履修となる。

サンドイッチ・コースに入学すると、職業養成の手配のいくらか、あるいは大部分は大学によってなされ、学生は異なる雇用主とある範囲の体験をもつことになるが、景気後退の時期には学生を企業内で配置することが困難になり、学生自身で配置を探し出すことが期待される。

6.4 博士の学位取得事例

一口に言えば、大学が学問的・学術的であるのにたいして、ポリテクニクは実用的・職業的なコースを設け、産業界の求める人材を供給する役割を果たしてきた。そして、ポリテクニクはカレッジとともに、主に教育機関として発展してきたものであって、大学に比し研究にそれほど重点を置いていきたとは思われない。したがって、これまで、すべての大学教員は研究者でもあるという仮

定の下に UGC は大学に補助金を交付しているのに対して、ポリテクニクでは、優れた研究をしている一部の教員はいるにしても、このような仮定はできないとさえ言われてきた⁽¹⁹⁾。

ポリテクニクのユニバーシティへの昇格は、当該大学への学位授与権の付与にはかならないが、UH はイングランドとウェールズにおける 30 のポリテクニクのなかで CNAAC により研究学位を認定されていた約 3 分の 1 に含まれており、教員の資格では問題が無かったと言われている。わが国では、これまで、高等教育の仕組み、それにとりなる学習方法、学位・称号の種類などは、旧制大学の流れを汲んで比較的単純であったので、英国におけるそれらは多くの日本人にとっては、ややもすれば複雑であり、容易に理解できない面がある。しかしながら、英国における高等教育システムはフレキシブルであることを特徴の一つとしており、我が国で平成 3 年に行われた大学等設置基準の大綱化や学位規則の改正により学習機会が多様化したことも、複雑ではあるが、フレキシブルになったものとして捉えたいと考えている。我が国では、近年、社会人のリカレント教育に対する需要に応じて、大学院の履修形態のいっそうの多様化、弾力化が推進されている。博士の学位については、第 2 次世界大戦後の教育改革によっても、大学院の課程によらない、いわゆる論文博士の途が残されており、これは社会人の要望に沿った学習機会の 1 つとも言えないことはない。

英国には論文博士の仕組みは無く、課程博士のみであるとされてきたが、著者の友人 Dr. C. J. Keatch は、本多光太郎と本多式熱天秤に大きな関心を抱き、1977 年に University of Salford から、“The History and Development of Thermogravimetry” の研究で PhD の学位を授与されている。同博士は当時、すでにかなりの年配であり、定職もあることから、著者は英国にも課程によらない博士もあり得るのではないかと疑問を抱いていたが、今回の訪英において、ある程度の理解を得ることができた。すなわち、当時 University of Salford で Dr. Keatch の指導教員であり、現在アメリカのオハイオ州トーレイド大学教授の Dr. D. Dollimore は英国の高等教育の仕組みが極めてフレキシブルであることを強調しており、Dr. Keatch は大学院学生として登録していたという。一方、Dr. Keatch によれば、大学院学生としての出席の義務は“regularly”を要求されるが、“frequently”ではなく、1 週間に 1 度でも、また 1 年に 1 度でも regularly である。このような事例は、ロンドン郊外の Teddington にある National Physical Laboratory (国立物理学研究所) を訪問したときにも散見した。同研究所では博士の学位をもたない常勤の研究者がロンドン大学インペリアル・カレッジの大学院に登録し、勤務先における研究によって学位取得を目指している例がある。この場合にも研究成果の報告・討議以外に大学に出る必要はないようであるが、当事者が研究所を退職すれば大学院への登録は無効になる。UH の大学院では、全日制および定時制にわたり、多様なコースが用意されているが、研究学位では、ポリテクニク時代の 1991 年には 200 の企業、研究機関などが共同研究のために登録している。これは上述の例に対応するものと考えられる。

7. おわりに

国際会議出席を機会に、会場となったハーフォードシャー大学 (UH) について、前身であるポリテクニクの創立の経緯、大学昇格に至る背景などを著者なりに整理し、同大学の現況と 2, 3 の

特色を簡単に説明した。

著者のUH滞在中は夏季休暇中であつたので、学内で学生の姿はほとんど見かけなかったが、内外の雰囲気は大学昇格の喜びに包まれているように見受けられた。これに対して、ポリテクニクの学長から引き続きUHの初代副学長となった Neil Buxton 教授は、本当の意味で始まったばかりであることを強調し、多くの不確実さを持ちながらも、同時に、機会があつたら掴むべき素晴らしい機会をともなつて、新しい発展の段階の出発点に立っていると述べている⁽⁵⁾。UH以外の新しい大学でもおそらく同様であろうが、ロンドンの地下鉄の駅構内には、ポリテクニクから昇格した幾つかの大学の、新時代に向けて学生の興味をそそるような募集ポスターが多く見られた。

滞英中には、1992年度 GCE-A レベル試験の結果がテレビで放映され、また新聞に掲載された。新聞では、“The A-level League Table -Results from 150 Top State Schools-” というタイトルで、高校名が得点順に記載され、高校も公立か私立か、男女共学か否かが分かるようになっている。この新聞を国際会議に出席した著者の友人の一人である University of Sheffield の教授に示して、Aレベル試験と大学との関連などについて幾つかの質問を行ったが、教授の孫の出身高校が上位にランクされているのを見て、歓喜の声を発していた。テレビや新聞に出てくる優秀成績取得者のインタビューの光景とともに、わが国における超一流大学、有名進学校などの合格者発表を想起させるひとこまであつた。

このような大学入試に始まり、大学を中心とする高等教育における学習、学士の学位の取得、大学院と研究学位、そして、それらを取り巻く社会的環境など、英国とわが国では数多くの相違点があり、また一方では共通性を見い出すこともあり得ると考えられる。今後は、この短期間の訪英で入手した僅かな情報を核として、多様化した高等教育と生涯教育の発展に資する研究を進めるよう努めたい。

本稿を草するにあたり、有益なるご助言を賜つた学位授与機構の館 昭教授に感謝の意を表する。

参 考 文 献

- (1) ジョン・プラット (阿部美哉訳) : 「英国高等教育におけるパブリック・セクター—良くなるのか・消えていくのか—」, I D E ・現代の高等教育, 1990年11月号, pp. 50~56 (1990).
- (2) John Dunford and Paul Sharp: The Education System in England and Wales, p. 17, Longman, London & New York (1990).
- (3) D. Lawton: Education and Politics in the 1990s: Conflict or Consensus?, p. 73, The Falmer Press, London & Washington, D. C. (1992).
- (4) 田中亮三: 「カントリー・ハウスを訪ねて—ロンドン郊外の館ハットフィールド・ハウスの魅力に触れる—」, アゴラ (Agora), Vol. 3, No. 2, p. 31, (株)日本航空文化事業センター (1993).
- (5) News of the University of Hertfordshire “HORIZON”, No. 56, July 1992.
- (6) 菊池城司: 「英国の「新大学」の理想と現実」, I D E ・現代の高等教育, 1980年10月号, pp. 23~30(1990).
- (7) 文献(3), p. 56.
- (8) 大崎 仁: 「英国高等教育のゆくえ」, I D E ・現代の高等教育, 1990年11月号, pp. 15~23 (1990).
- (9) 芝田政之: 「英国大学の管理運営の動向」, I D E ・現代の高等教育, 1991年12月号, pp. 58~65.
- (10) University of Hertfordshire Full-time, sandwich and part-time courses 1993-1994, University of Hertfordshire, May 1992.

- (11) 竹内 洋：パブリック・スクール—英国式受験とエリート—，講談社現代新書，p.42，講談社（1993）。
- (12) 潮木守一：「イギリス高等教育の評価—大学予算配分方式の改革を中心に—」，I D E・現代の高等教育，1990年11月号，pp. 23～31（1990）。
- (13) 矢沢 彬：「高専における横型技術者の育成」，日本工業教育協会誌，Vol. 38, No. 2, pp. 21～27（1990）。
- (14) 佐久間孝正：イギリスの文化と生涯教育—ケンブリッジの夜間学校—，p. 41，人間の科学社（1983）。
- (15) 大崎 仁：「英国の学位授与会と高等教育」，I D E・現代の高等教育，1977年2月号，pp. 42～47（1977）。
- (16) Alan Jamieson: Your Choice of Degree and Diploma, 4th ed., p. 29, Hobsons Publishing PLC, Cambridge (1990).
- (17) 阿部美哉：「高等教育の変化する機能と革新の意義—OECD日本セミナーの概要—」，I D E・現代の高等教育，1984年5月号，p. 6（1984）。
- (18) The University of Salford Undergraduate Prospect 1980～1981, University of Salford, June 1979.
- (19) 文献(3)，p. 74.

Reformation of the Higher Education System in the United Kingdom: Upgrading of Polytechnics to University Status

Yasutoshi SAITO*

A brief report was given on the recent reformation of the higher educational system in the United Kingdom with emphasis on upgrading processes of polytechnics to university status in 1992 followed by the abolition of the so-called 'binary line'. Several characteristic features at the University of Hertfordshire were also reviewed as an example of new universities created by the upgrading of polytechnics.

The recommendation of the 1963 Robbins Report brought the foundation of polytechnics in the late 1960s as non-university institutions of higher education. The polytechnics were concerned mainly with professional and vocational courses, and were controlled and financed through the Local Education Authority (LEA). The barrier between universities and polytechnics lasted until recent years as the binary line, which was one of the stranger features of British higher education. As a result of the 1988 Education Reform Act, the polytechnics became independent of the LEA control, and were financed on a national basis. In May of 1991, the *White Paper on Higher Education: A New Framework* proposed the abolition of the binary line, which had lasted for many years. Based on this proposal, all the polytechnics in England and Wales were upgraded to university status in 1992.

The University of Hertfordshire (UH) was given the title from the Privy Council on June 16, 1992 by upgrading the Hatfield Polytechnic. Hatfield Technical College (which was the UH's earliest predecessor) started in 1952. The college was renamed as Hatfield College of Technology in 1958, and then was designated a regional college by the Ministry of Education. Hatfield College of Technology was nominated as one of the new polytechnics, and became the Hatfield Polytechnic in 1966.

The UH has inherited several characteristic features of the Hatfield Polytechnic. The Combined Studies scheme offers a wide range of subjects and a large variety of subject combinations for the honours degree level, allowing the study of two or three subjects in major/minor or twin-mode combinations. The Sandwich Courses are available at some technological universities, including the UH, and are closely linked to industry. Students spend a full year, or two or more separate shorter periods totalling one year in industry. Academic study can be alternated by actual industrial experience. The UH has established a new network of the Associate Colleges, providing a strong link between higher education and further education. Under this scheme, the county's four colleges of further education are working with the UH, offering the courses for university degrees, in which students can study in the first year at a college and at the UH in their remaining years.

*Professor, National Institution for Academic Degrees.

